The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語文化学 Vol.22　学会の活動/会則/執筆要項
Author(s)	
Citation	大阪大学言語文化学. 2013, 22, p. 105-115
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77774
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

学会の活動

平成 24 年 6 月 28 日　大阪大学言語文化学会第 41 回大会

(2012 年度春季 大阪大学言語社会学会・言語文化学会合同研究発表会)

＜研究発表＞

李　　静（言文）：日本語作文授業におけるピア・レスポンス実施に関する教員の意識調査―中国の大学でのインタビューから

潘　　寧（言文）：小学校における JSL 児童生徒に対する日本語教育の一考察―ある日本語指導協力者のライフヒストリーからみる

森本　圭子（言文）：臨界期仮説とモニター・フィードバックの特性と関連について

張　　若星（言文）：中国人日本語学習者が話す日本語と中国語のイントネーションの対比―フォーカス別によるピッチ曲線変動からの分析

クブラコワ・ナタリア（言社）：日本語とロシア語間における「フォールス・フレンド」の特徴

前田晃　寿（言文）：時を表す副詞節の解釈の曖昧性に関する統語的分析

八尾紗奈子（言社）：チャガ語ヴンジョ方言の名詞について

黒谷　茂宏（言社専攻助教）：中間 “解釈”。意味論と通言語的展望

林　　美里（言文）：消えゆく民族意識―下ラウジッツの事例より

楊　　霊琳（言社）：沈従文の早期の創作について

伊藤　　啓（言文）：安懐南の前期身辺小説における知識人男性主人公の性格について―調和型の七作品を中心に

松本　承子（言社）：『聖女ジャンヌ・ダルク』―流動するアイデンティティ

池坂　麻記（言社）：メイエルホリドのプレドィグラー

シピトゥーニナ・マリーナ（非常勤）：神の性別表現―『古事記』上巻を中心として

＜総会＞

活動報告

委員改選

新委員：

山本佳樹（委員長）、森祐司（副委員長）、深澤一幸（学会誌前半）、今尾康裕（学会誌後半）、上田　功（春の大会運営担当）、ヨコタ村上孝之（秋の大会運営担当）、秋田喜美（書記）、中村　静（事務局）、中野遼子、林　蔚榕、伊藤　啓、

汪　南雁、馬リャンリャン

会計報告（次頁のとおり）

平成 24 年 10 月 25 日　大阪大学言語文化学会第 42 回大会

（2012 年度 大阪大学言語社会学会・言語文化学会合同研究発表会）

＜研究発表＞

藤原　郁郎（言社）：リーダビリティ指標の可能性と限界
—日・米・英・韓・中の英字新聞の分析を通じて

佐藤　美紀（言文）：幼稚園における英語教育の導入状況
—小学校英語の開始学年への示唆

松倉　　緑（インディペンデント・リサーチャー）：
吉本ばなな『キッチン』の英語訳の比較対照分析
—翻訳研究の日本語教育への応用

DUONG VAN BINH（言社）：ベトナム語における夫婦間の呼称法についての研究

林　　愛美（言社）：東アフリカ牧畜社会における FGM 廃絶プロジェクト

王　　貝（言文）：日中文献における「九尾の狐」のイメージの変遷と日中比較

横山　香奈（言文）：ハワイにおける「日系」の定義変容
—沖縄系日系人と混血日系人からの影響を中心に—

東田　吉史（言社）：輻輳する「迷宮」——Don DeLillo の Mao II を読む

平川　　和（言社）：『キャッチャー・イン・ザ・ライ』と資本主義—
—アメリカに “NO” をつきつけた若者の運命

飯盛　康史（外国語学部非常勤講師）：『ヘンリー 5 世』における
フランス語使用が持つ演劇的機能について

平成 25 年 3 月 31 日『言語文化学　第 22 号』発行

＜査読者＞

伊勢芳夫、岩根　久、植田晃次、大谷晋也、尾崎久男、越智正男、金崎春幸、川喜田敦子、木原善彦、小門典夫、小口一郎、小杉　世、佐藤　彰、杉本孝司、田畑智司、津田保夫、ディボフスキー A、成田　一、西田理恵子、早瀬尚子、日野信行、平山晃司、古川敏明、水野博子、三藤　博、三牧陽子、村岡貴子、村上スミス アンドリュー、山下　仁、由本陽子、力武京子、我田広之、渡邊伸治、渡辺秀樹

《平成 23 年度　大阪大学言語文化学会　会計報告》

（単位：円）

収　入		支　出	
予備費（前年度繰越金）	2,473,428	『言語文化学』第 20 号発送費	39600
学会費・賛助金	852,565	『言語文化学』第 20 号増刷分印刷代	26775
バックナンバー	7,500	『言語文化学』第 21 号印刷代	184275
利息	1,809	郵送費	19,480
抜刷郵送費差額	220	大会補助運営費	70,950
		大会受付謝礼	12,000
		事務局補助人件費	106,950
		消耗品費	34,943
		振込手数料	840
		予備費（次年度繰越金）	2,839,709
計	3,335,522	計	3,335,522

（平成 24 年 3 月 31 日現在）

平成 24 年度会計担当委員　　石川　弓子

会計監査（平成 24 年 6 月 1 日）　　渡邊　伸治

菊池　太希

大阪大学言語文化学会会則

第１条　本会は大阪大学言語文化学会と称する。

第２条　本会の会員は次の２種とする。

1. 通常会員　大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻の教員、大学院学生、大学院修了者（言語文化学専攻の修了者も含む）で所定の会費を納めたもの。
2. 特別会員　元教員及び本会にとくに貢献したもの。

第３条　本会は会員の学術研究を促進するとともに、研究成果の普及をはかり、広く学術全般の進展に寄与することを目的とする。

第４条　本会は前条の目的を達成するために研究会を開催し、機関誌を発行する。

第５条　本会の会員は機関誌の配布を受ける。

第６条　本会は第３条の目的を達成するために年１回、言語文化学会総会を開催する。

第７条　本会に次の役員をおく。

1. 会長及び委員、監事をおく。
2. 会長を言語文化専攻長、副会長を副専攻長とする。
3. 委員は原則として教員より８名、大学院学生より５名を選出する。なお、別に事務担当をおくことができる。
4. 監事は２名とし、会計の監査にあたる。監事は会長が委嘱する。

第８条　本会に委員会をおく。

1. 委員は前条３の委員をもって構成する。
2. 委員会に委員の互選による委員長、企画・編集委員（若干名）、会計委員（若干名）をおく。
3. 委員会は本会の運営にあたる。

第９条　役員の任期は次の通りとする。

1. 会長及び副会長の任期は言語文化専攻長及び言語文化副専攻長の任期に従う。
2. 委員の任期は１年とする。
3. 監事の任期は１年とする。

第10条　本会の経費は会員の会費及びその他の収入による。

1. 会費は付則の定めるところによる。
2. 本会の会計年度は４月より翌年３月までとする。

第 11 条 本会の事務局は大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻内におく。

付則　1. 通常会員は会費として年間 3000 円を納める。

2. この会則の改正は、総会において出席者の 3 分の 2 以上の賛同を必要とする。

3. 本会則は平成 3 年 5 月 8 日より発効する。

平成 19 年 10 月 25 日改定

『大阪大学言語文化学』執筆要項

1.「論文」または「研究ノート」について

本文の言語が日本語か日本語以外かによって提出する必要があるファイルが異なるため、下の表で確認すること。

電子媒体のファイルは、事務局（genbunjl@lang.osaka-u.ac.jp）宛の電子メールに添付して提出すること。各ファイル名は表中の提出ファイル名とし、「yourname」を各自の氏名（「tanakaminoru」や「johnsmith」等）に置き換えたものに変更すること。

紙媒体のファイルは、表中のファイル番号が偶数のものを活字印刷で3部ずつ、事務局宛に提出すること。あわせて、ホームページよりプリントアウトした「投稿論文チェックシート」も3部提出すること。複数枚で構成されるファイルは、1部ずつステープルで用紙の左上を綴じること。用紙はA4サイズで横書き。本文は和文または欧文に限る。和文原稿の場合は40字×30行（タイトル、本文・脚注とも11ポイント）、欧文原稿の場合は30行（タイトル、本文・脚注とも12ポイント）の書式を用いること。引用文のポイント数を落とすことはできない。文字間、行間を狭めることはできない。

ファイル番号	提出ファイル名	提出する必要があるファイル	
		本文が日本語	本文が日本語以外
1	hyoshi_yourname.doc	○	○
2	hyoshi_yourname.pdf	○	○
3	yoshiA_yourname.doc	○	○
4	yoshiA_yourname.pdf	○	○
5	yoshiB_yourname.doc	○	
6	yoshiB_yourname.pdf	○	
7	honbun_yourname.doc	○	○
8	honbun_yourname.pdf	○	○

ページ番号は、本文だけに付ける。それぞれの執筆上の注意は、以下のとおり。

(1) 表紙：

表紙ページに以下のように記入すること（[ ] 内は説明）。

論文の題名［本文と同じ言語］*［半角アステリスクを1つ付ける］
［1行あける］
執筆者氏名［本文と同じ言語］**［半角アステリスクを2つ付ける］
［1行あける］
キーワード3語［本文と同じ言語］
［3行あける］

*［半角アステリスク１つと、半角スペース］　論文の題名［本文と異なる言語］（執筆者氏名）［丸かっこをつける。本文と異なる言語で。非ローマ字言語の場合は、ローマ字表記も付記する］
［1 行あける］
**［半角アステリスク２つと、半角スペース］　執筆者の所属［日本語で書く］

・タイトルとサブタイトルのつなぎ方、スペース、大文字と小文字の区別等は、以下の例にあわせること（論文名等は『言語文化学』Vol.12 から引用）。

— 論文題名の書き方 —

（日本語、中国語などの場合）
フランス語化政策とマイノリティー
—ケベック州移民統合政策の縮図としての中国系移民—
（英語の場合）
An Unweeded Garden That Grows to Rhyme:
The Relationship between William Shenstone's Gardening and His Poetics

英語の場合は、タイトル、サブタイトルの最初の語の先頭を必ず大文字にする。それ以外の語も、冠詞、前置詞、等位接続詞、不定詞の to を除いて、大文字で始める。（それ以外の言語は、それぞれの慣例に従うこと）

—氏名の書き方—

（日 本 語 例）言文　太郎
（朝 鮮 語 例）겐분 다로（GENBUN Taro），김민호（KIM Minho）
［朝鮮名・中国名の場合は、姓名を分かち書きしないこと。］
（中 国 語 例）胡　琳（HU Lin）［ローマ字表記は日本語読み（KO Rin）等でも可。］
（英 語 例 1）GENBUN Taro［姓（全大文字）＋名前（先頭だけ大文字）］
（英 語 例 2）Taro GENBUN［名前（先頭だけ大文字）＋姓（全大文字）］
（ロシア語例）ИВАНОВА Мария（IVANOVA Mariya）［ローマ字表記も付けること。］

— 所属の書き方（必ず日本語で）—

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程（学生の場合）
大阪大学言語文化研究科（常勤教員の場合）
大阪大学非常勤講師（非常勤講師の場合）　　など

— キーワードの書き方 —

（日本語例）キーワード：ホテル、都市メディア、消費文化

（英 語 例）Keywords: *ut pictura poesis*, the garden-poetic relationship, Thomas Percy's ballads

(2) 論文要旨 (A)

日本語で1,000字以内。冒頭に「論文要旨（A)」と書き、日本語で論文の題名を付ける。執筆者氏名は書かない。

(3) 論文要旨 (B)

本文を日本語で執筆した場合のみ、提出が必要。

日本語以外の言語で書く。欧文の場合は400ワード以内。中国語、朝鮮語の場合は1,000字以内。冒頭に「論文要旨（B)」と書き、要旨（B）と同じ言語で論文の題名を付ける。執筆者氏名は書かない。

(4) 本文

(a) 執筆言語

日本語、英語、独語、仏語のいずれかの言語で執筆することが可能である。但し、英語、独語、仏語のネイティブスピーカーは、母語以外の言語を選択すること。

(b) 原稿の長さ、字数

「論文」和文ではA4用紙13枚以内、欧文ではA4用紙18枚以内（図表・参考文献・注など全てを含んだ枚数)。図表・参考文献・注など全てを含んだ完成原稿を提出すること。本文の字数（図表・参考文献・注など全てを含む）は和文で12,000字以内、欧文で5,000ワード以内とする。

「研究ノート」和文ではA4用紙10枚以内、欧文ではA4用紙15枚以内（図表・参考文献・注など全てを含んだ枚数)。図表・参考文献・注など全てを含んだ完成原稿を提出すること。本文の字数（図表・参考文献・注など全てを含む）は和文で9,000字以内、欧文で4,000ワード以内とする。執筆者は原稿提出の際、言語文化学会ホームページより「文字カウント表」をダウンロードし、書式に従って字数を申告する。

(c) 書式設定

余白は上35mm、下30mm、左28mm、右28mmに設定する。

(d) 冒頭に本文と同じ言語で論文の題名を付ける。執筆者氏名は書かない。

(e) 章・節番号

「0」ではなく「1」から始めること。漢数字表記は認めない。

— 章・節番号の書き方 —

1（半角スペース）セクション題名（「1.」「1章」「Ⅰ」などとしない）

1.1(半角スペース)サブセクション題名(ピリオドのあとにも半角スペース。「1.1」「1.1.」とはしない)

1.1.1（半角スペース）サブサブセクション題名（ピリオドのあとにも半角スペース。「1.1.1」「1.1.1.」とはしない）

(f) 和文中の句読点「。」と「、」を用いる。

(g) 数字表記

横書きであることを考え、原則としてアラビア数字を用いる。アラビア数字は半角で入力する。

(h) 文字修飾

網掛けは希望通りの濃さに印字されない可能性があるので、使用しないこと。過度な文字装飾は避けること。

(i) 例文番号

例文の先頭に (1)、(2)、(3) などの丸かっこ付きの番号を用いる。下位区分には、a.、b.、c. を用いる。

— 例 —

(1)　東京に行った。

(2) a. * 田中さんに行った。

　　b.　田中さんのところに行った。

(j) 図表

図表には番号と図表名を本文と同じフォントサイズで付ける。図表中の文字のサイズは原則として9ポイント以上とする。

(k) 参考文献・引用文献の表記

参考文献の一覧は本文の後につける。下記の例を参考にすること。

— 日本語文献例 —

著者名『著書名』発行元、発行年。

著者名「論文名」『掲載誌名』巻号数、発行元（発行団体）、発行年、pp.1-16。

著者名（発行年）『著書名』発行元、発行年。

外国語文献の場合は、それぞれの言語の慣例に従うこと。

(l) 注

注は通し番号をつけて頁末脚注とする。注のフォントサイズは、本文と同じとする。本文中の注番号としては、「これは例文です[1]。」のような上付き文字を用いる。

(m) 謝辞

査読に不都合があるので、応募時には謝辞を書かない。採用決定後は短い謝辞を記載してもよい。

(n) その他

査読に不都合があるので、応募時には本文、または注釈に投稿者の匿名性を損なう事柄を書き込まない。自分の過去の学会発表、論文に基づいて本論文を執筆する場合、20XX 年の発表に基づいている等を書くのは良いが、発表者名は採用決定後に書くこと。

2.「書評」および「図書紹介」について

どちらも和文で A4 用紙 4 枚以内（4,000 字以内に）、欧文で A4 用紙 7 枚以内（1,800 ワード以内に）。「図書紹介」は、当該度出版または出版予定で、筆者自身が執筆または編集に携わった図書の紹介記事とする。「書評」は、それ以外の図書を対象とする。

用紙は A4 サイズで、横書きとする。和文原稿の場合は、11 ポイントで 40 字 ×30 行、欧文の原稿の場合、12 ポイントで 30 行とする。提出方法、その他の規則は論文、研究ノートに準じる。提出原稿の形式は以下の通り。

(1) 1 枚目：書評者名、書評の対象となる本の書名

(2) 2 枚目以降：書評の対象となる本の書名、著者、出版社、（出版地、）出版年度、ISBN、本文

3. その他

＜原稿の種類変更＞　一度提出された原稿の種類（論文、研究ノート）は、原則として変更できない。

＜投稿内容の変更＞　投稿希望時の論文タイトルと比べて、内容が大きく異なる原稿を投稿することはできない。

＜ネイティヴ・チェック＞　本文、論文要旨とも、母語以外で書かれた部分については、かならずネイティヴ・チェックを受けてから提出すること。文章力が著しく劣る場合は内容の如何にかかわらず不採用となることがある。

＜第三者のチェック＞　一定の水準で査読が行われるために、執筆者は事前に読み合わせを行うなど、投稿前に第三者に目を通してもらうことが望ましい

＜無断引用・剽窃＞　引用箇所については、出典をはっきりと示すこと。査読段階で盗用・剽窃が指摘された場合、不採用とする場合がある。

＜チェックシート＞　言語文化学会ホームページより「投稿論文チェックシート」をダウンロードし、本執筆要項に従って執筆していることを確認した後、シートを提出すること。

その他執筆に関して不明な点があれば、大阪大学言語文化学会事務局（genbunjl@lang.osaka-u.ac.jp）まで問い合わせること。